

英語教育に関する新しいアプローチへの提案

—ビートルズの曲「Because」を中心に—

平見 勇雄

A suggestion on the new approach to Japanese English education

Isao HIRAMI

Abstract

There have been many mistakes about the translations of lyrics from English to Japanese on the popular music such as the Beatles and famous songs. Most of them have never been improved since they were published for the first time, although many translators seemed to try their best to understand what the lyrics imply. The reason why Japanese translators have made the same kind of mistakes is due to the lack of the importance of the sense of humor, play on words and so on. So it seems to be hard for many translators even to find play on words in the lyrics. When they find it, it is essential to add the explanations to lyrics in Japanese. As far as I know, the explanations have never been found so far.

The aim of this paper is to make sure that lessons on the importance of play on words and rhymes should be done in Japanese English education.

Key words : English education, play on words, rhymes

キーワード : 英語教育, 言葉遊び, 韻

はじめに

英語教育の改革が叫ばれて久しい。かつてより英語教育の改革に関しては何度もその必要性が訴えられてきた。近年、研究者たちが声をあげ大きく問題提起されたのは「英語教育, 迫り来る破綻」(ひつじ書房, 2013年)が発行された頃ではないかと思う。

昔からよく言われていたのは、語弊を恐れずに言えば「日本人は読解はできるが、長年勉強しても少しもしゃべれるようにならない」ことが大きな英語教育の問題点だと指摘され、リスニングや会話を積極的に取り入れるべきだとのことで教育内容も方針転換がはかられた。私が受験生の頃にはなかったリスニングが大学入学センター試験に取り入れられていることから

わかる。

リスニングが英語教育に必要であることは理解できるが、かつてより身近な経験から、英語教育には別の面で大きく欠けていることがあるのではないかと思っていたことがある。

それは英語圏の文化に関する知識である。今回取り上げたいのはその一つである言葉遊びやユーモアのセンスである。なぜこれがリスニングや会話同様にそんなに大切なのか。実際に起こっているポピュラー音楽の対訳の例を出して考察してみたい。

1 ビートルズの歌詞の対訳に関する現実

今回はポピュラー音楽に関する例の一部を考察したい。時代を問わず、ポピュラー音楽の代表は誰か、どのグループか？との問いにビートルズの名を挙げられることに異論はないだろう。ビートルズがどのようなグループで、どのくらい社会に影響を与えたかに関しては、正確ではなくともある世代以上なら、説明が不要なくらい、その人なりに語るができるだろう。現在の若者でもその名は知っている。20世紀最大のロックグループとしばしば言われるが、20世紀に限らず今後もおそらくその存在を超えるグループは現れないと思われる。時代を超える名曲を多く生み出した功績は大きい。音楽を聴く環境がレコードからCD、さらに別の媒体へと変化していき、売り上げの点では今後上回っても、時代に与えた影響力やメロディの持つ魅力を始めとして総合的な観点からビートルズを凌駕することは難しい。それくらいポピュラー音楽史においては絶大な存在である。

そういう存在だけにビートルズ関連の書籍は膨大で、解散して50年以上が経つというのに、現在でも毎年新しい視点から考察された本や雑誌が次々と組まれる。それだけ取り上げられる側面が多い。他のアーティストやグループでは決してこういう現象が見られないのは、解散して半世紀経ってもビートルズを超えるグ

ループが今も現れていない証拠でもある。そのため、たとえば歌詞に関しては多くの訳者によってビートルズ詩集と名打った本が日本だけでこれまで何冊も出版されている。

しかしそれらの対訳を見ると、本来はプロとして訳を担当する者なら当然のごとく心得ているはずなのに、全く理解していないのではないかと推測されるものが多く目につく。訳によっては、解釈が全く分かれている曲があったり（たとえば「愛こそすべて」という曲。ここでは取り上げないが実はこれも今回問題としている言葉遊びになっている）、またタイトルが誤訳されていることでも有名な曲もある（1965年にリリースされた「ノルウェーの森」という曲で、タイトルにある森は木材、あるいはその木材から作られた家具である）。

今回は『ABBEY ROAD』に入っている「Because」という曲を取り上げることにしたい。著作権の問題もあるので、本来は極力引用しなければならない箇所に絞りたいが、この曲は歌詞のほぼ全体に言葉遊びが隠されているため、各所をその都度取り上げたい。

初めにこの曲をこれまで多くの訳者がどのように訳しているのか、代表的な数人の実状を見てみたい。

2 これまで行われてきた訳

順に各ラインの対訳を比較したい。最初のラインは次のような文である。

Because the world is round, it turns me on.

それぞれ訳者はどう訳しているだろうか。

1973年に片岡義男氏が訳した「ビートルズ詩集(1)」では「地球が丸いからぼくを目覚めさせてくれる」とある。レコードについている歌詞カードは何人かの訳者がいるが当時訳者としては最も有名な一人で、個人的には最も信頼できる訳者だった山本安見氏は「地球が丸いから僕は陶然となってしまう」と訳している。1987年に出た「ビートルズ詩集」で岩谷宏氏は「世界

がまるいから生命（いのち）は着火する」とある。

多くの本やレコードは絶版、廃盤となっているが、今でも版を重ね最もよく読まれていると思われる本が「ビートルズ全詩集（改訂版）」で内田久美子氏が訳を担当している。その訳は「地球が丸いから僕は心を奪われる」である。

次のラインは以下の英文である。

Because the wind is high, it blows my mind.

片岡義男氏の訳では「風がつよいから僕の心を吹きとばす」となっており、山本安見氏は「風が激しく吹きすさぶから僕の心まで吹き飛ばされる」である。岩谷宏氏は「風が激しいから心もちぎれそうだ」であり、内田久美子氏は「風が激しいから僕の理性は吹き飛ばされる」となっている。

途中にメロディの異なるブリッジのところがあり、ここは次のようなラインである。

Love is old, love is new.

Love is all, love is you.

それぞれの訳はどうなっているか。片岡義男氏は「愛は古く 愛は新しい 愛はすべて 愛はきみ」となっていて、山本安見氏は「愛は古く 愛は新しい 愛はすべて 愛はきみ……」と、……を除くと片岡氏と全く同じである。岩谷宏氏は「愛が古い愛が蘇る 愛だけが、きみのことだけが、心を占めて」となっている。内田久美子氏の訳は「愛は古く 愛は新しい 愛はすべて 愛は君」である。

最後のラインは次のような英文である。

Because the sky is blue, it makes me cry.

片岡義男氏は「空が青いのでぼくは泣けてくる」と訳しており、山本安見氏の訳は「空は青いから僕を泣きたい気持ちにさせる」となっている。岩谷宏氏は「空が青いからとても泣けてくる」であり、内田久美子氏は「空が青いから僕は泣きたくなる」である。

他にも公式のレコードやCDの対訳を数人の訳者が担当しているが、ほぼ同様の内容である。こういう訳は基本的には英語に精通した人たちが担当している

「はず」である。経歴がネットで追えない人もいるが、掲載されている著者の経歴を見ると、それなりの経験を積んでいることから、普通に勉強してきた人以上に英語に自信のある人だろうし、海外に短期、長期を問わず留学経験がある訳者もいる。しかもこういう訳者の人たちはポピュラー音楽が好きで、中には音楽評論の方が専門のように見受けられる人もいるので、バックグラウンドとしてアーティストに関する知識も十分ある。したがってビートルズの歌詞には精通している。上記に取り上げた人は、どの訳者もビートルズのほぼ全曲の対訳を行っていることからわかる。

ビートルズの場合は最初に述べたように世界中でいろいろな種類の本が出版され、その数も膨大で途切れることがない。新しいエピソードを当時の関係者が次々と公にしていることもあるし、それに基づいて調べられた事実も多い。一昔前の音楽雑誌と違い、詳細なデータが手に入るようになってから、それぞれの側面でコメントも専門的になってきている。

にもかかわらず、この曲をはじめ何曲かのビートルズの歌詞に隠されている（隠されているという表現は実際は適切ではなく、母国語としない国の人たちにとという意味である。ネイティブは当たり前のように気付いている）言葉遊びを指摘している本が見つからない。作詞をした人（この場合ジョンレノン）が工夫した内容を訳者はほとんど何も理解していない現実がある。何人もの訳者が数年単位で再販される際に新しい訳を行っているのに、どの訳者も既存の訳の範囲を出ることがない。

訳者が言葉遊びを我々日本人に理解させるためにはどうしてもそれを説明する注釈が必要である。まずはその理由を述べたい。

3 日本にも広く浸透している言葉遊び

ビートルズの出身地であるイギリスは、日本でも4月1日のエイプリルフルで知られているようにユー

モアのセンスが浸透している国である。そういう文化が根付いているので訳する時にも当然そういった面を考慮して、内容によっては背後に隠れていないかを常に意識しながら取り組まないといけない。特にそれぞれのアーティストの作った多くの歌詞を読めば、自ずとその好みや特徴が明らかになる。

ただユーモアのセンスは英国だけのものではない。日本でも日常的にいろいろな場面で経験している。身近な例で言えば、漫才や落語はユーモアのセンスが大前提としてあると言って差し支えない。そもそもユーモアのセンスのない漫才があるだろうか。

ユーモアのセンスは日本のサブカルチャーの代表として挙げられるマンガやアニメにも頻繁に見られるし、サラリーマン川柳などはユーモアに溢れた句がたくさんある。ユーモアこそが命と言っていい。

そしてそのユーモアを作り上げるのに貢献する手段の代表的なものの一つがまさに言葉遊びである。言葉遊びにはいろいろなタイプがあるので、この対訳に関連する種類の遊びも含めて思いつくまま並べてみる。

1970年代から人気のあった「あのねのね」という男性のフォークデュオは、歌の中でさまざまなタイプの言葉遊びをしている。たとえば1980年9月に発売された「みかんの心ぼし」という曲（原田伸郎・作詞）の中にある「紫色のマニキュアをし黄色い旗を振って青信号になるのを待っていた緑のおばさんはアカの他人だった」という表現は、色彩を表す語をうまく並べて言葉遊びをしている。このシングルのB面には「親子水入らずでプールに行った親子は海水パンツを忘れたために親子水入らずで帰ってきた」というラインがあるが、これは親子水入らずという慣用表現と、実際にプールに入れなかったのが水に入らなかったということを重ねた言葉遊びとなっている。

日本では芸名をさまざまなものから拝借した表現があり、それらも言葉遊びの一種と言えるだろう。たとえば歌手の吉幾三は「よし、行くぞ」からだし、有名な小説家である江戸川乱歩は、アメリカの小説家エド

ガー・アラン・ポーをもじったものである。作曲家である久石譲は、マイケルジャクソンのプロデューサーとしても有名なクインシー・ジョーンズの名を日本語に当てはめた芸名である。

テレビ番組のタイトルでも二つの表現を重ね合わせたものがいくつもある。有名なものは「そこまで言って委員会」で、委員会は「いいのかい？」を重ねたのだし、杉田玄白で有名な「解体新書」の解体を別の同音の言葉に置き換えて「買いたい新書」という、話題の本を取り上げるテレビ番組もある。

これらはどれも既存の表現を別の表現と重ね合わせ面白さを出している。しかも日本は漢字を使うことから英語とは違う、独特の言葉遊びが生まれる。

こういった表現の多くは、重ね合わせた二つをわざわざ説明しなくとも日本人には説明不要であるが（もちろん解体新書をまだ知らない年齢の子供には理解できないが）、一旦外国語に直すとすると、説明をつけないと理解してもらえない。あまりいい例とは言えないが、たとえば「僕の友人でマラソンが大好きなのがいて、マラソンばかりしているんだよね。だからかな。時々女に走るんだ」という文が言葉遊びとして成り立っているのは「マラソン」と「走る」という語の間に意味的に共通項となって重なる部分があるからである。またこの場合の「走る」という表現は比喩的な使われ方であるからこそ、言葉遊びとして成立している。

また漢字圏だからこそ成立する言葉遊びの典型的なものは次のような例だろう。同音異義の表現をうまく使っているサラリーマン川柳である。

「はなさない 十年経ったら はなさない」

最初の「はなさない」は「離さない」で、後ろの「はなさない」は「話さない」である。最初は相手を離したくないほど夢中であっても、年月が経つと嫌な部分が見えてきたり、情熱が冷めて飽きてしまい、会話がなくなってしまふという意味合いの句である。

このように言葉遊びにはたくさんの種類があるが、ビートルズの「Because」を扱うにはこれくらいの例

で十分だろう。そしてこれらの例を見ると、言葉遊びは我々日本人にとって決して特別なものではなく、日常によく浸透しているということがわかる。ただ大切なことは、我々日本人がこういう表現を英語に訳す場合は、英語を母語とする人たちには必ず注釈をつけないといけないということである。たとえば今挙げたサラリーマン川柳の「離さない」をI'll never let you goと訳し、「話さない」をnever talkと訳しただけでは、日本語で感じられる面白さが英語を読む人に伝わらない。意味はわかって、この句が本来持つ魅力は全く理解できない。欠かすことができないのは、日本語の「はなさない」には同音異義として二つの意味があることを注として記述しないといけないということである。この川柳の命はまさにそこにあるからだ。

以上のことから、逆に英語でなされている言葉遊びを日本語に訳す際も同様の断り書きが当然ないといけな。なければ作詞をした人の真意や面白さは全く伝わらないからである。では「Because」にはどのような言葉遊びがあるのだろうか。

4 この曲に見られる言葉遊び

ごく簡単に説明を行う。最初のラインは次のようなものであった。

Because the world is round, it turns me on.

Roundとturnはいずれも自動詞で「まわる」という意味がある。その点で共通しているが、一方は丸いという意味で使われており、一方はonとともに別の意味合いを醸しだしている。これは、上で挙げた「マラソン」と「走る」で言葉遊びが成立するのと似ている。「マラソン」と「走る」は違う語であるが両者には共通する意味合いがある。しかもこの英文では実際に使われている意味がそれぞれ異なっているので我々日本人は指摘されないと気付かない。したがって原文が持っている関連性を注釈としてつけてもらう必要がある。

次のラインはBecause the wind is high, it blows my mind.であった。これはthe wind is high自体が次の行のblowと同義に近い意味を持っている。前者は（自動詞ではないが）自動詞的意味あいを持っている一方、blowは他動詞の意味あいもある。風が強いので何かを吹き飛ばすということと関連するのであるが、吹き飛ばす対象が物理的なものではなくmindを持ってくることによって、その意味が比喩的に使われているから言葉遊びになる。先ほどの日本語の例で「マラソン」と「走る」の共通する意味に「ギャンブルに走る」「女に走る」のように本来の意味を外れ、別の話題に持っていくことによって新しい意味が生まれ言葉遊びになるのと同様である。

途中のブリッジの部分はLove is old, love is new. Love is all, love is you.である。

言葉遊びとは呼ばないが、それぞれ韻を踏んでいて、そこに焦点が置かれている。つまり下線部のoldとallは、日本語の発音で言えば「オール」となり、太字で示しているnewとyouは「ニュー」と「ユー」なので韻を踏んでいる（これらの語は英語で韻を踏む際の常連で、ビートルズのデビュー曲「Love me do」でもブリッジの部分でsomebody new, someone like youと使われている）。

こういう場合、日本語訳をいくら読んでも真意が伝わらない。原文を読んで初めて韻が踏まれている跡を確かめることができるのだから、注釈でそれを説明する必要がある。

最後のラインであるBecause the sky is blue, it makes me cry.はまさにジョンレノンらしい言葉遊びになっている。彼が作詞作曲したビートルズ2枚目のシングルとなった「Please please me」は同じ発音のpleaseをそれぞれ別の意味で使っている。最初のpleaseは「どうか」という意味で、次のpleaseは「喜ばせる」という他動詞である。同じ発音、綴りの語で、違った意味を持つところを言葉遊びにしている。ここも同じでblueには「青い」という意味とfeel blueでよく使われ

る「憂鬱な気分になる」という意味のblueを重ねている。だから泣きたくるのである。これまで担当したどの訳者も「空が青いから僕は泣きたくなる」という訳しかしていない。もちろん注釈はついていない。

しかし空が青いから泣きたくなる人は一般常識的に考えているのだろうか。こういう内容に何の疑問も持たずに訳がなされていることに驚きを覚えてしまう。ビートルズが解散して半世紀以上経ち、何人もの人たちが訳をしているのに、ちっとも訂正や新しい視点からの対訳が出て来ない。

これまでの訳を担当した人たちは、英文に書かれている内容ばかりに気を取られていて、それ以外のことに目が向いていないのが実情だ。それは対訳を担当した人だけに限らない。たとえば秋山直樹氏は「ビートルズ作品読解ガイド」という本の中で(108ページ)最初のラインに関して「難解です。「世界が丸い」ことと「興奮する」もしくは「興味が起きる」こととの間に因果関係が見えない」とし、ブリッジの部分では「allは、形容詞ではなくて、「すべての人」または「すべての物」という意味の不定代名詞であろうと思われる。「万象」, 「宇宙」を意味する名詞の可能性も否定できません」とある。最後のラインに関しては「空が青いから、泣きたくなる」でよいでしょう。青色には悲観的なイメージがありますから」と結んでいる。悲観的イメージがあると解釈していることから言葉遊びに全く気付いていない。

また小島智氏の「ビートルズでもっと英会話」(206~208)にも筆者独自の解釈が展開されている。唯一、「前にroundという言葉が使われたから、turnが出てきたのは想像に難くない」という指摘がある。しかし他のラインに関して一切言葉遊びととらえているところがないことと、指摘して関連には気付いているものの、言葉遊びという点からこの二つをとらえている様子はない。

つまり語感や韻、言葉遊びという側面に一切目が向くことなく、表面上の文章、語句の中に意味を見出そ

うとすることに終始している。

ビートルズの誤訳に関しては、ネット上でも自分たちの解釈を主張している動画がいくつもある。私がここで言いたいことは、作詞者が意図した基本的なことが訳されていれば、そのあとその詞をどう解釈するかは自由で、そこに作者が意図していない方向に内容を見出すのは勝手である。

問題なのは、以下でも少し触れるが、ここまで韻を踏んで作られていること、言葉遊びが行われていることがはっきりしているのに、そこに気付かずに対訳を行っていることだ。

しかも文法的にきちんと検討されているのかと言えば、必ずしもそうとも思えない。それと関連して「Because」というタイトルの日本語訳について述べておきたい。

上ではどの箇所も最初の2行の部分だけを切り取って説明してきた。しかし実際は最初のラインが最後に繰り返されている。つまりBecause the world is round, it turns me on. Because the world is round.となっているのである。他の段落も同様で、次の段落ではBecause the wind is high.がついており、最後の段落ではBecause the sky is blue.が繰り返されている。

文法的な点から言えば、頭にあるBecauseと最後のラインとなるBecauseは同じ接続詞ではあるが違っている。頭にあるBecauseは次の主節にかかる従位接続詞になっている。だからit turns me on.と二つで一文だ。一方の最後のラインであるBecause the world is round.はこれで一文。だから単文で使われている接続詞だ。したがって一方は原因を意味する接続詞なので「~なので」と訳す。もう一方は「なぜなら」である。

その点で言うと、タイトルはカタカナで「ビコーズ」とするのがいいように思う。片岡義男氏はタイトルを「だって」と訳し、小島智氏は「なぜなら」である。これでは日本語の場合は片手落ちになる。山本安見氏、内田久美子氏は「ビコーズ」とカタカナ訳にしているが、一部の例外を除き、他の曲も英語をそのま

ま日本語読みにしているなのでこの二つの意味を含意してタイトルをつけているわけではない。余談になるが岩谷宏氏に至っては「風景は愛に染まり」となっている。岩谷氏のタイトルを見ると、この短い歌詞に深い読みを試みているため、無理やりに自分なりの解釈を提示しようとしているが、そもそもジョンレノンはこの曲で短い言葉に深い意味を込めようとして作詞しているようには思えない。つまり言葉遊びや語呂が曲の本命であるから間違った方向に対訳が行っていることは一目瞭然である。しかもこの曲だけ特別にこういった言葉遊びが見られるのなら仕方ないが、ジョンレノンは以前より、多くの言葉遊びを行っていることから、彼が詞作する際の特徴を知ってさえいれば、こういうことは起こらないはずである。

日本人が対訳をする際、こういう間違いがずっと起こってきたのは、やはり日本の英語教育に何かしら欠如した部分があり、そこが疎かにされたためではないかと思われる。スピーチも大切なコミュニケーションの武器であるが、こういったダジャレを含めた言葉遊びに対しての理解が大きく欠けていることが対訳や翻訳に対する間違いを生んできたことは明らかである。今後これらの問題を改善するための教育にも光が当たって欲しいと切に願う。

まとめ

私の大学では英語スピーチコンテストが毎年6月に行われている。スピーチは高校生を対象としており、高校一年から三年まで偏ることなく参加してくれる。地元をはじめ、近県からの参加者も多く、学生は最大限の力を出そうと4分間のスピーチにその学生なりに全力を注ぐ。指導される先生方の努力も後押しとなって素晴らしいスピーチも多く、誰を表彰するか順位をつけるのが難しいことも多いくらいで、レベルの高い学生が集まってくる。緊張気味の様子でスピーチする学生、自信があるのか、余裕を持ってしゃべる学生な

ど、学生の性格や個性もあり、スピーチ自体はさまざまであるが、一生懸命さは伝わる一方で、共通しているのはユーモアのセンスを感じられるスピーチは残念ながらほとんどないことである。そこまで高校生に求めるのは無理なのかもしれないが、毎年2～3名の参加者の中で、ユーモアが一部でもスピーチに取り入れられる学生は数年に一人。大半は内容、流暢さを競うことに焦点が当たり過ぎているように思われる。

一つには指導する先生方自身が、ユーモアの大切さが重要であることを認識していないことにあるのではないかと思う。

現在の中学、高校生の英語の授業はどうだろうか。私が中学、高校の時には遊びと言えば、たまに英語のゲームをしたり英語の歌を歌ったりする程度だった。今では変わっているのではないかと思うし、先生や学校によって遊びをふんだんに取り入れている度合いも種類もさまざまだろう。

「はじめに」の所にも書いたように、日本人は中学、高校で6年も英語を習っているのに一向に話せるようにはならないという数十年もの間言われてきた批判、かつての英語教育に対する見直しの必要性から、リスニングやスピーチに教育の重要性の度合いが移ってきたこともあって、リスニングは大学入試にまで取り入れられるようになった。

それはそれでいいことだと思うが、リスニングやスピーチに目が向けられるのは、一般の人たちが英語を習ってきて自分たちが外国人とコミュニケーションを取るときに痛感する、当たり前の、目に見える経験だからである。

一方、上で述べたような言葉遊びについては何の問題提起もされないし、されたという話を聞いたこともない。それはこういった対訳が特殊な職業として認識され、ごく一部のの人たちに限られていることもあるのだろう。しかもかかわっている人たちのほとんどが、自分が言葉遊びを見落としているという意識がない。そうすると原文に頼らず訳者をプロとして認識してい

る一般の人たちが、こういった問題があることを知ることはほとんどないと言っていいだろう。おそらくネイティブで日本語もよくできるバイリンガルな人が、この仕事を受ければ、このようなことが繰り返されることはないだろうが、私の知る限り、この職に向き合っている人がなぜかほとんどいない。

訳者が何人交代しても、上記のような問題は一向に解決していない。

さらに英語の世界では有名な人がこれまでの対訳に不満があり、誤訳を指摘する本も過去に発行されているが、それを見ると、やはり言葉遊びにきちんと向き合っているのか疑わしいと思われる記述がある。たとえば「ビートルズが伝えたかったこと」という本の中に「All you need is love」の現在、多くの対訳本で訳されていることへの批判があるが（そしてその点は基本合っているが）、ここでも白黒はっきりさせて、どちらが正解かということに重点が置かれているため、言葉遊びがされていることに気付いていない。

こういう事例を見ると、対訳に携わっている人たち

全体に共通して欠けていることが見えてくるし、ましてや世間一般には全くと言っていいほどこの問題は認識されていない。

ここで取り上げた訳者は年代から言ってかつての英語教育を受けてきた人たちと言える。したがって間違いが改善されない（というよりも気付かない）のは、本人たちの能力ももちろんあるのだろうが、私はまさにここに日本の英語教育の弊害が強く表れていると思う。そしてこの点に気付き、取り入れていかなければ、この状況は今後もずっと続いていくだろう。

英語の授業で取り上げられる「遊び」はその時だけのこととして普段の英語の授業とは切り離されてしまう場合も少なからずあるのではないかと思う。しかし遊びを紹介して一時的に取り上げても決して本当の意味で英語の神髄の一つをなしている側面の理解にはつながらない。

まずはこういう現状を共有していくことから英語教育を考える一歩にしてはどうかと提案したい。

参考文献

- レコードの対訳 山本安見 1992年7月29日リリース レコード番号 TOJP-7083
 ビートルズ詩集 (1) 片岡義男訳 角川文庫 1973年10月3版
 ビートルズ詩集 岩谷宏訳 シンコーミュージック 1987年
 ビートルズ全詩集 (改定版) 内田久美子訳 シンコーミュージック 2000年初版, 2021年10月22版
 ビートルズでもっと英会話 小島智 ワニ文庫 2001年1月初版発行
 ビートルズ作品読解ガイド 秋山直樹 プイツーソリューション 2008年1月初版発行
 ビートルズが伝えたかったこと・歌詞の背景&誤訳の深層 里中哲彦・遠山修司 秀和システム 2019年3月21日 第一版第一刷